白居易諷諭詩考

成田静香

一　はじめに

『白氏長慶集』の詩巻は諷諭詩・閑適詩・感傷詩・律詩に分けられている。このいわゆる四分類は元和十年（八一五）白居易が自らの手で詩集十五巻を編んだ際に創出したものである。この詩集十五巻の編纂について語った「元九に与うる書」（巻二八・1486）において諷諭詩は次のように説かれている(1)。

拾遺より来、凡そ遇ふ所感ずる所にして美刺興比に関する者、又た武徳より元和に訖るまで、事によって題を立て題して新楽府と為す者、共て一百五十首、之を諷諭詩と謂ふ(2)。

詩集十五巻自体は残っていないものの、右の「一百五十首」の詩は現存する詩集から推定することがほぼ可能である。しかしこの説明は百五十首全てにあてはまるものではない。まず「拾遺より来」というが、実際には左拾遺就任以前の詩がある。

左拾遺就任後へのこだわりは同じ手紙の中の別の所でも触れられている。

登朝より来、年歯漸く長じ、閲事漸く多く、人と言う毎に多く時務を詢り、書史を読む毎に多く理道を求むるに、始めて知る、文章は合に時のために著すべく、歌詩は合に事のために作るべきを。

これは白居易が自分は「登朝」後、つまり左拾遺および翰林学士として皇帝に直接仕えるようになった後に、時の政治のための詩に目覚めたと考えていたことを示している。先の「拾遺より来」という説明はこの自覚を重視してのものであろう。実際、諷諭詩においては左拾遺および翰林学士在任中のものが過半数を占め、しかもその時期のものには「新楽府五十首」「秦中吟十首」など政治や風俗を諷するものが多い。

それに対し左拾遺および翰林学士就任以前の諷諭詩は数が少なく、その題材はほとんど白居易の身の周りの問題である。また『白氏長慶集』を編む段階で詩集十五巻の諷諭詩に増補されたと考えられる江州での諷諭詩には左遷された白居易自身を詠うものが多い。

例えば、

文柏牀（巻一・0060）

文柏牀

1陵上有老柏　陵上に老柏有り
2柯葉寒蒼蒼　柯葉寒くして蒼蒼たり
3朝爲風煙樹　朝には風煙の樹為るに
4暮爲宴寢床　暮には宴寢の床と為る
5以其多奇文　其の奇文多きを以て
6宜升君子堂　宜しく君子の堂に升るべし
7刮削露節目　刮削して節目を露はし
8拂拭生輝光　払拭して輝光を生ず
9玄班狀狸首　玄班　狸首に状り

10素質如截肪　素質　截肪の如し
11雖充悦目翫　目を悦ばしむる翫（もてあそびもの）に充つと雖も
12終乏周身防　終に周身の防ぎ乏し
13華彩誠可愛　華彩誠に愛す可きも
14生理苦已傷　生理已に傷るるに苦しむ
15方知自殘者　方に知る自ら残ふ者
16爲有好文章　好文章有るが為なるを

「文柏牀」に白居易自身を託していることは言うまでもない。身の不幸はその才華によって招かれたものであるとすることにより、不遇を受け入れようとするかのごとくである。この詩は時の政治のための詩、言い方を変えれば「秦中吟十首」等と同じ目的で作られたものとは考えにくい。しかしこの詩もまた諷諭詩なのである。したがって白居易の言う登朝後の認識は諷諭詩全般に通じるものではない。またそもそもこの詩は「元九に与うる書」（巻二八・1486）の語る詩集十五巻以後のものである。したがって諷諭詩とは何かという問題を考える際、「元九に与うる書」（巻二八・1486）の検討だけで済ませることはできない。それとは別にどのようなものが諷諭詩と位置付けられているのかを検討しなければならない。そこで本稿は『白氏長慶集』の諷諭詩をいくつか取り上げ、それを検討することにより諷諭詩の要件を明らかにしようとするものである。

なお考察にあたり対照する閑適詩・感傷詩は江州期までのものとする。忠州期以降の楽府・歌行を除く五言古詩については、忠州・長安での作が全て感傷詩に、杭州での作が全て閑適詩に収められ、実際には分類配分が行われていないからである(3)。

二　賦　比　興

白居易は貞元十六年（八〇〇）進士科に及第、さらに貞元十八年（八〇二）末から翌年初めにかけての書判抜萃科に及第し、秘書省校書郎を授かった。同僚の中には元稹がいた。諷諭詩の中で最も早い時期に作られたとみなされているのが次の詩である。

初入太行路詩（巻一・0043）

初めて太行路に入る詩

1天冷日不光　天冷たく日光らず
2太行峯蒼莽　太行　峯　蒼莽たり
3嘗聞此中險　嘗て聞く此の中の険たるを
4今我方獨往　今　我方に独り往く
5馬蹄凍且滑　馬蹄は凍り且つ滑り
6羊腸不可上　羊腸として上る可からず
7若比世路難　若し世路の難きに比ぶれば
8猶自平於掌　猶ほ自ずから掌より平らなり

この詩について花房英樹『白氏文集の批判的研究』では貞元十九年（八〇三）前後の作とし、朱金城『白居易集箋校』では貞元二十年（八〇四）前後の作としている(4)。太行は現在の河南省・河北省・山西省にまたがる大山脈であり、その険しさは古来有名であった。この詩は第六句までその道を通った際の苦しさを詠った後、これも世間の道に

比べれば平坦なものだと結ぶ。

右と対比するために、当時の白居易が自分の人生の大変さを詠ったものを感傷詩から挙げよう。

1養無晨昏膳　養ふに晨昏の膳無く
2隱無伏臘資　隱るるに伏臘の資無し
3遂求及親祿　遂に親に及ぼす祿を求め
4僶俛來京師　僶俛して京師に来たる
5薄俸未及親　薄俸未だ親に及ばず
6別家已經時　家に別れて已に時を経
7冬積溫席戀　冬は温席の恋を積み
8春違采蘭期　春は采蘭の期に違ふ
9夏至一陰生　夏至一陰生じ
10稍稍夕漏遲　稍稍として夕漏遅し
11塊然抱愁者　塊然として愁を抱く者
12夜長獨先知　夜の長きを独り先づ知る

（「思歸」巻九・0427）

この詩は校書郎に就任した貞元十九年（八〇三）の作と認められている。この詩の場合白居易は人生の辛さを具体的・直接的に描いている。これに対し「初めて太行路に入る詩」（巻一・0043）の場合人生の辛さそのものは描かずに、太行山の道を進むことの大変さを描き、それによって人生の辛さを浮かびあがらせている。これは詩の六義の一つ「興」の手法であり、この詩は「興」による詩ということになる。

次に校書郎に就任した翌年の諷諭詩を挙げる。

哭劉敦質詩（巻一・0016）

劉敦質を哭す詩

1小樹両株柏　小樹　両株の柏
2新土三尺墳　新土　三尺の墳
3蒼蒼白露草　蒼蒼たる白露の草
4此地哭劉君　此の地に劉君を哭す
5哭君豈無辭　君を哭すに豈に辞無からんや
6辭云君子人　辞に云う君子の人
7如何天不弔　如何ぞ天弔まず
8窮悴至終身　窮悴して身を終るに至る
9愚者多貴壽　愚者　多くは貴寿にして
10賢者獨賤迍　賢者　独り賤迍す
11龍亢彼無悔　龍亢りて　彼　悔無く
12蠖屈此不伸　蠖屈して　此　伸びず
13哭罷持此辭　哭し罷るに此の辞を持ってす
14吾將詰羲文　吾　将に羲文を詰らんとす

劉敦質は後に挙げる詩からわかるように少なくとも貞元十九年（八〇三）当時、白居易の同僚であった人物である。これはその劉敦質の死を悼む詩である。これもまた別の類の詩と対比してみよう。

傷楊弘貞（巻九・0393）

楊弘貞を傷む

1顔子昔短命　顔子　昔　短命

2仲尼惜其賢　仲尼　其の賢を惜しむ

3楊生亦好學　楊生亦た学を好む

4不幸今復然　不幸にして今復た然り

5誰識天地意　誰か識らん天地の意

6獨與龜鶴年　独り亀鶴にのみ年を与ふるを

この詩の場合、第一句・第二句において楊弘貞その人ではなく、孔子と顔回のことを挙げているが、これは「初めて太行路に入る詩」（巻一・0043）の場合とは異なり、詩題にある楊弘貞の死について語るもの、つまり夭折であったことを語るために典故を用いているものである。一方「劉敦質を哭す詩」（巻九・0393）は劉敦質を哭す自分の姿を描くことから始めているものの、単にその死を嘆き悲しむのではなく、そこから世の不条理を訴えている。そしてその不条理な存在を喩えるのに「龍」と「蠖」という対比的なものを用いている。これは易の

上九は亢龍なり、悔有り（「乾」爻辭）

尺蠖の屈するは以て信びんことを求むる也（「繫辞下傳」）

にもとづき、上りつめて後悔が生じるはずの龍が悔いることなく、伸びるために身を縮めたはずのしゃくとり虫が伸びられないと言うことにより、それぞれ地位も寿命も得ている愚者・どちらも得られない賢者に喩えている。これは詩の六義の「比」の手法であり、この詩は「比」による詩ということになろう。

同じ頃の作と見なされている諷諭詩を今一首挙げよう。

寄隠者（巻一・0058）

隠者に寄す

1賣藥向都城　薬を売りて都城に向ひ
2行憩青門樹　行きて青門の樹に憩ふ
3道逢馳驛者　道に馳駅の者に逢ふ
4色有非常懼　色に非常の懼れ有り
5親族走相送　親族走りて相ひ送る
6欲別不敢住　別れんと欲して敢て住らず
7私恠問道旁　私かに怪みて道の旁らに問ふ
8何人復何故　何人ぞ復た何故ぞと
9云是右丞相　云ふ是れ右丞相
10當國握樞務　国に当たりて枢務を握る
11祿厚食萬錢　禄厚くして万銭を食み
12恩深日三顧　恩深くして日に三顧す
13昨日延英對　昨日は延英に対し
14今日崖州去　今日は崖州に去る
15由來君臣間　由来　君臣の間
16寵辱在朝暮　寵辱　朝暮に在り
17青青東郊草　青青たる東郊の草

18中有歸山路　中に帰山の路有り
19歸去臥雲人　帰り去れ　雲に臥す人
20謀身計非誤　身を謀る　計　誤るに非ず

このように物語的な諷諭詩もある。これは詩の六義で言えば、「賦」の手法によるものである。以上のように諷諭詩には早い時期から「賦」「比」「興」それぞれによるものがある。

三　竹

元和元年（八〇六）白居易は元稹とともに秘書省校書郎を辞職、華陽館にこもって受験勉強をし、四月才識兼茂明於体用科に及第、白居易は盩厔県尉を、元稹は左拾遺を授かった。しかし元稹はあまりに積極的に上書し意見を述べたことから執政に厭われ、九月河南県尉に左遷された。さらに同じ月に母親が死去し、喪に服することとなった。この頃白居易が元稹へ贈った諷諭詩がある。

贈元稹詩（巻一・0015）

元稹に贈る詩

1自我從宦遊　我　宦遊に従ひてより
2七年在長安　七年長安に在り
3所得唯元君　得る所は惟だ元君のみ
4乃知定交難　乃ち知る　交を定むるの難きを
5豈無山上苗　豈に山上の苗無からんや

6 徑寸無歳寒　径寸　歳寒無し
7 豈無要津水　豈に要津の水無からんや
8 咫尺有波瀾　咫尺　波瀾有り
9 之子異於是　之(こ)の子是に異なり
10 久處誓不諼　久しく処るも誓ひ諼(わす)れず
11 波無古井水　波無し　古井の水
12 有節秋竹竿　節有り　秋の竹竿
13 一爲同心友　一たび同心の友と為り
14 三及芳歳蘭　三たび芳歳の蘭(をばり)に及ぶ
15 花下鞍馬遊　花の下　鞍馬の遊
16 雪中盃酒歡　雪の中　杯酒の歓
17 衡門相逢迎　衡門に相ひ逢迎し
18 不具帶與冠　帯と冠とを具せず
19 春風日高睡　春風　日高くして眠り
20 秋月夜深看　秋月　夜深けて看る
21 不爲同登科　登科を同じくする為ならず
22 不爲同署官　署官を同じくする為ならず
23 所合在方寸　合ふ所は方寸に在り
24 心源無異端　心源　異端無し

第二句に「七年在長安」とあり、また白居易が進士科受験のため長安に出てきたのが貞元十六年（八〇〇）であるから、この詩は元和元年（八〇六）の作と考えられる。ただしその年のいつ頃作られたかについてはわからない。朱金城は『白居易集箋校』においては長安での作、つまり二人の及第前の作とし、共著『白居易詩集導読』では元稹の母没後の作とし、「詩人は元稹の心情を理解し同情している」とするが、制作時期について考えを変えた理由については何も記していない(5)。左遷され、母をも失った友に贈った詩という解釈は一見魅力的である。しかし改めてこの詩を読むと、左遷に対する怒りあるいは不幸に対する同情といったようなものがほとんど感じられない。したがってこの詩は元稹の左遷を知る前のものであろうと筆者は考える。

さてこの詩はその内容から前半と後半に分けることができる。前半は元稹について長安に暮らす間に得た友は君だけであり、君は「山上苗」でも「要津水」でもなく、「古井水」・「秋竹竿」であると喩えている。元稹を無二の親友と呼ぶことは校書郎を共に辞し、制科のための受験勉強に取り組んだ事実から見ても誇張ではない。「山上苗」の語は左思「詠史八首」を典故とする。

1 鬱鬱澗底松　鬱鬱たる澗底の松
2 離離山上苗　離離たる山上の苗
3 以彼徑寸莖　彼の径寸の莖を以て
4 蔭此百尺條　此の百尺の条を蔭ふ
5 世胄躡高位　世胄は高位を躡み
6 英俊沈下僚　英俊は下僚に沈む
7 地勢使之然　地勢　之をして然らしむ
8 由來非一朝　由来　一朝に非ず

（『文選』巻二一）

左思のそれは「澗底松」と「山上苗」を対比することにより不遇の士を嘆くものである。しかし白居易は元稹を「松」になぞらえずして「竹」になぞらえている。つまり白居易はここで元稹を不遇の士としてではなく、節という徳を持った人物として描くための言葉を選んでいるのである。

後半は親友となって三度歳末を迎え、その間、官職を離れたところで交わってきたとする。そもそも白居易は校書郎就任当初にも官衣を解いた交わりを求める詩を同僚たちに贈っている。

常樂里閑居題十六韻兼寄劉十五公輿王十一起呂二炅呂四頴崔十八玄亮元九稹劉三十二敦質張十五仲方時爲校書郎（巻五・0175）

常楽里閑居　偶ま十六韻を題し兼ねて劉十五公輿・王十一起・呂二炅・呂四頴・崔十八玄亮・元九稹・劉三十二敦質・張十五仲方に寄す　時に校書郎為り

1帝都名利場　帝都は名利の場にして
2鷄鳴無安居　鷄鳴　安居する無し
3獨有懶慢者　独り懶慢たる者有り
4日高頭未梳　日高くして頭未だ梳らず
5工拙性不同　工拙　性同じからず
6進退跡遂殊　進退　跡　遂に異なる
7幸逢太平代　幸ひにして太平の代に逢ひ
8天子好文儒　天子　文儒を好む
9小才難大用　小才　大ひに用ひ難く

10典校在秘書　典校して秘書に在り
11三旬兩入省　三旬　両び省に入り
12因得養頑疎　因りて頑疎を養ふを得たり
13茅屋四五間　茅屋　四五間
14一馬二僕夫　一馬　二僕夫
15俸錢萬六千　俸錢　万六千
16月給亦有餘　月給(つきづきん)りて亦た余り有り
17既無衣食牽　既に衣食の牽無く
18亦少人事拘　亦た人事の拘少し
19遂使少年心　遂に少年の心をして
20日日常晏如　日日晏如たらしむ
21勿言無己知　言ふ勿れ　己を知る無しと
22躁静各有徒　躁静　各の徒有り
23蘭臺七八人　蘭台七八人
24出處與之俱　出処之と俱にす
25旬時阻談笑　旬時　談笑を隔つれば
26旦夕望軒車　旦夕　軒車を望む
27誰能儺校間　誰か能く儺校の間
28解帶臥吾廬　帶を解きて吾が廬に臥せん

29窻前有竹翫　窓前に竹の翫ぶべき有り
30門外有酒沽　門外に酒の沽る有り
31何以待君子　何を以てか君子を待たん
32數竿對一壺　数竿　一壺に対せん

この詩は閑適詩である。同僚に寄せた詩でありながら、官服を脱ぎ竹を愛でながら酒を飲むことを誘う内容である。「元稹に贈る詩」（巻一・0015）の後半はまるで、この詩の呼びかけに応じてくれたのが元稹であったと言うようなものである。その意味で詠われた内容はこの閑適詩とよく似ている。しかし詩全体を比べたとき、「竹」という語の使い方が大きく違っている。「常楽里閑居　偶ま十六韻を題し兼ねて劉十五公輿・王十一起・呂二炅・呂四頴・崔十八玄亮・元九稹・劉三十二敦質・張十五仲方に寄す　時に校書郎為り」（巻五・0175）第二十九句のそれは私的空間を形作る舞台装置であり、愛玩の対象だが、「元稹に贈る詩」（巻一・0015）第十二句のそれは元稹を喩えるためのものである。その点において「元稹に贈る詩」（巻一・0015）もまた「比」によるものなのであるが、その際、対立する二組を挙げながら一組については定型をはずしているところがおもしろい。次に元稹がこの詩に応えた詩を見る。

元稹が「元稹に贈る詩」（巻一・0015）に応じた詩を作ったのは数年を隔てた後のことである。元稹は元和四年（八〇九）に母の喪が明け、二月監察御史に任じられ、五月洛陽の東台に送られた。翌元和五年（八一〇）都へ帰還することになったが、その途中、敷水駅に宿泊したところ、遅れて内官の劉士元が駅舎に到着し、表座敷を奪いあう事件が起きた。元稹は若輩でありながら権威をかさにきるようなことをしたとして、江陵府士曹参軍に左遷された。次の詩はこの左遷の後に作られたものと考えられる。

種竹（『元氏長慶集』巻二）

竹を種う

昔樂天贈予詩云、無波古井水、有節秋竹竿、予秋來種竹廳下、因而有懷、聊書十韻。

昔楽天予に詩を贈りて云ふ、波無き古井の水、節有る秋の竹竿と、予秋来たりて竹を庁下に種う、因りて懐ひ有り、聊か十韻を書く。

1 昔公憐我直　昔　公　我の直なるを憐れみ
2 比之秋竹竿　之を秋の竹竿に比す
3 秋來苦相憶　秋来　苦りに相ひ憶ひ
4 種竹廳前看　竹を種ゑて庁前に看る
5 失地顏色改　地を失ひて顔色改り
6 傷根枝葉殘　根を傷め　枝葉残はる
7 清風猶淅淅　清風　猶ほ淅淅として
8 高節空團團　高節空しく団団たり
9 鳴蟬聒暮景　鳴蝉は暮景に聒しく
10 跳蛙集幽欄　跳蛙は幽欄に集まる
11 塵土復晝夜　塵土　昼夜に復し
12 梢雲良獨難　梢雲　良に独り難し
13 丹丘信云遠　丹丘　信に遠しと云はば
14 安得臨仙壇　安んぞ仙壇に臨むを得ん
15 瘴江冬草綠　瘴江は冬も草緑にして

16何人驚歳寒　何人か歳寒に驚かん
17可憐亭亭幹　憐れむ可し　亭亭たる幹
18一一青琅玕　一一青き琅玕
19孤鳳竟不至　孤鳳竟に至らず
20坐傷時節闌　坐に時節の闌(をは)るを傷む

冒頭、かつてあなたは私が率直であることをよしとし、竹に喩えられたとする。しかし「元稹に贈る詩」（巻一・0015）において白居易は元稹の率直さを詠ったのであったろうか。白居易は元稹が友情において変節することがないということを、寒さに負けない竹、節がある竹によって詠ったのであって、元稹の率直さを詠ったわけでも、竹がまっすぐに天を目指す様を描いたわけでもない。しかし元稹は白居易の意を離れ、「竹」に別の意味を託した。これはおそらく率直さこそ自分の長所であるとともに災いの種であると思い知らされたところから出てきたものであろう。そして以下元稹のこの詩は二人の友情ではなくもっぱら自分のことを詠う。南方では珍重されることがない竹によって自らの不遇を詠うのである。これに再び白居易が応じた。

元和元年（八〇六）盩厔県尉を授かった白居易は、元和二年（八〇七）翰林学士に充てられ、元和三年（八〇八）官も左拾遺に転じた。そして元和五年（八一〇）京兆府戸曹参軍に転じた。先にも述べたように、この年元稹が江陵に左遷され、「竹を植う」（『元氏長慶集』巻二）を作った。それに応えたのが次の詩である。朱金城は『白居易集箋校』において、この詩を元和五年（八一〇）の作としているが、元和五年（八一〇）元稹の左遷後の作であることは確かであるものの、元和五年（八一〇）の作と断定することはできないものと考えられる。

酬元九對新栽竹有懷見寄（巻一・0027）

元九の新たに栽ゑたる竹に対して懐ひ有りて寄せらるるに酬ゆ

1昔我十年前　昔　我　十年前
2與君始相識　君と始めて相ひ識る
3曾將秋竹竿　曾て秋の竹竿をもって
4比君孤且直　君の孤にして且つ直なるに比す

ここでは白居易がかつて秋の竹によって元稹の孤り直いことに喩えたとしている。すでに見たように白居易の最初の詩は元稹の直さ、言い換えれば率直さを詠っていたわけではない。また白居易にとってただ一人の友人とはしていたが、元稹の孤高を詠っていたわけでもない。ここでは最初の自分の詩ではなく、元稹の詩を受けて、そこにさらに「孤」のイメージを付け加えている。つまり剛直さ故に阻害された現在の元稹を喩える「竹」に変換しているのである。

5中心一以和　中心　一に以て和し
6外事紛無極　外事　紛として極まり無きに
7共保秋竹心　共に秋竹の心を保ち
8風霜侵不得　風霜も侵し得ず

七句目において「竹」はさらにその役割を変える。ここで竹は二人を喩えるものに変わる。

9始嫌梧桐樹　始めて嫌ふ　梧桐樹の
10秋至先改色　秋至れば先づ色を改むるを
11不愛楊柳枝　愛さず　楊柳枝の
12春來軟無力　春来れば軟らかくして力無きを

13憐君別我後　憐む　君　我と別れて後
14見竹長相憶　竹を見て長く相ひ憶ひ
15常欲在眼前　常に眼前に有らしめんと欲し
16故栽庭戸側　故(ことさら)に庭戸の側に栽ゑたるを
17分首今何處　首(こうべ)を分ちて今何処
18君南我在北　君は南　我は北に在り
19吟我贈君詩　我の君に贈りし詩を吟じ
20對之心惻惻　之に対して　心　惻惻たらん

さらに第十三句以降、今度は元稹の植えた現実の竹に転じ、しかもそれは有節・孤高といった固定された意味を離れ、「竹」の詩を贈った白居易の代わりとなり、そこでそれを見つめる元稹の心を思いやって結んでいるのである。

ここでもまた同じ時期の別の類の詩と対比してみよう。

春暮寄元九（巻九・0408）

春暮　元九に寄す

1梨花結成實　梨花結んで実と成り
2燕卵化爲雛　燕卵化して雛と為る
3時物又若此　時物又た此くの若し
4道情復何如　道情復た何如
5但覺日月促　但だ日月の促(はや)きを覚え
6不嗟年歳徂　年歳の徂くを嗟かず

7浮生都是夢　浮生は都て是れ夢なり
8老少亦何殊　老少亦た何ぞ殊らん
9唯與故人別　唯だ故人と別れ
10江陵初謫居　江陵に初めて謫居す
11時時一相見　時時一たび相ひ見ん
12此意未全除　此の意未だ全くは除かれざらん

白居易に会いたいという気持ちだけは消えていないであろうと詠うことにより、二人の友情を確かめるものである。これと比較した場合、「元九の新たに栽ゑたる竹に対して懐ひ有りて寄せらるるに酬ゆ」（巻一・0027）は同じ離別の悲しみを詠うものではあるが、「竹」に元稹および自分を託し、またそれを際だたせるための「梧桐」と「柳」を配したという点において「比」の詩なのである。

「竹」の語の用い方についてはすでに閑適詩と比較したが、「梧桐」「柳」についても他と対比してみよう。

早秋獨夜（巻五・0188）

早秋独夜

1井桐涼葉動　井桐　涼葉動き
2隣杵秋聲發　隣杵　秋声発る
3獨向簷下眠　独り簷下に向かって眠り
4覺來半床月　覚め来れば半床の月

この詩は元和二年（八〇七）作とされる閑適詩である。この詩における「桐」は秋の気配を真っ先に知らせるものとして描かれている。

1春來有色闇融融　春来り色有るも闇くして融融たり
2先到詩情酒思中　先づ詩情　酒思の中に到る
3柳岸霏微裊塵雨　柳岸霏微たり　塵を裊す雨
4杏園澹蕩開花風　杏園澹蕩たり　花を開く風

（「和錢員外答盧員外早春獨遊曲江見寄長句」巻一二・0585）

この詩は元和二年（八〇七）から五年（八一〇）の作とされる感傷詩である。川岸の柳が春の柔らかな雨にしっとりと濡れている様が、杏が春風に促れて花開こうとする様とともに春の景色として描かれている。この二首における「桐」や「柳」が季節の景物として詠いこまれているのに対し、「元九の新たに栽ゑたる竹に対して懐ひ有りて寄せらるるに酬ゆ」（巻一・0027）における「梧桐」と「柳」は元稹と対比されるべき人々を喩えるための記号なのである。

四　おわりに

以上、いくつかの諷諭詩を時代順に見てきた。そこから見えてきたことを整理すると、まず手法に着目すれば、諷諭詩には「初めて太行路に入る詩」（巻一・0043）のように「興」を用いたものがある。江州での諷諭詩の例として挙げた「文柏牀」（巻一・0060）もまた「興」による詩である。ただし「文柏牀」（巻一・0060）の場合は、文柏牀を白居易自身になぞらえていることは状況からうかがわれるが、詩中においてそれを明示してはいない。また「劉敦質を哭す詩」（巻一・0016）・「元稹に贈る詩」（巻一・0015）「元九の新たに栽ゑたる竹に対し懐ひ有りて寄せらるるに酬ゆ」（巻一・0027）は「比」による詩である。「隠者に寄す」（巻一・0058）は「賦」による詩である。

「興」を用いると、具体的な事柄から普遍的命題を導き出すことができる。また「比」を用い、対象を典型的対立物の一方に置き換えると、対象を一般化することができる。「賦」は虚構性が強く、その意味において普遍性が高い。結局、白居易は折々の感情を直接的に表出するのではなく、「賦」「比」「興」によって問題を普遍化・一般化する操作を経たものを諷諭詩として認定したのではないだろうか。

その中で例えば「元稹に贈る詩」（巻一・0015）「元九の新たに栽ゑたる竹に対し懐ひ有りて寄せらるるに酬ゆ」（巻一・0027）に見られた典型を組み替える、先の詩と後の詩で「竹」に託す意味を変える、同じ詩の中で「竹」の語の役割を変える等の試みは「比」による表現の可能性の模索と位置付けられるであろう。また「興」についても「初めて太行路に入る詩」（巻一・0043）におけるそれは常套的なものだが、江州期の「文柏牀」（巻一・0060）は素材が非凡であるだけでなく、何になぞらえたのかが明示されない究極の「興」であり、、その間に大きな成長がみとめられるのである(6)。

注

(1) 白居易の詩文には那波本の巻数と花房英樹『白氏文集の批判的研究』（彙文堂、一九六〇年）綜合作品表作品番号を付す。
(2) 四部叢刊『白氏長慶集』は「遇」を「適」に作る。『金沢文庫本白氏文集』（勉誠社、一九八三・四年）により改める。
(3) 拙稿「白居易の詩の分類と変遷」『白居易研究講座』第一巻、勉誠社、一九九三年。
(4) 朱金城『白居易集箋校』上海古籍出版社、一九八八年。
(5) 朱金城・朱易安『白居易詩集導読』巴蜀書社、一九八八年。
(6) ただし以上は楽府・歌行を除く五言古詩に限ってのことである。楽府・歌行は『白氏長慶集』においては巻三・巻四（「新楽府五十首」）の諷諭詩と巻十二の感傷詩に分けられているが、巻十二の感傷詩には「婦人苦」（巻一二・0597）等、本文で明らかにした諷諭詩の要件を備えたものがある。したがって楽府・歌行については「新楽府五十首」が大量なので、それだけを諷諭詩に入れ、他はたとえ諷諭詩の要件を満たしていても感傷詩に置いたのかもしれない。

――文学部専任講師――